

希望

チューリッヒ日本人学校便り

平成 27 年 9 月 7 日発行

第 19 号

発行人 校長 鈴木史良

地元紙に日本人学校登場！

—— スイス人記者が見たチューリッヒ日本人学校 ——

夏休み前に Züricher Oberland 新聞社から本校を取材したいという連絡がありました。内容は本校の教育内容や教師、児童生徒、保護者代表へのインタビューとのこと。この地域の人々に本校の様子を知っていただく絶好の機会と捉え、以前勤務した日本人学校でも同様の経験があったので、二つ返事で承しました。

8月24日(月)、予定通りクンツラー記者が来校。カメラマンも後から来校し、本校の取材が行われました。記事は早くも29日(土)の新聞に掲載されました。以下に、スイス人記者の視点で見た本校の様子をお知らせいたします。

日本茶・お弁当・マンツーマン授業

学校を訪問した第一印象では、日本茶が出てくるまでスイスの現地校と比べてそれほど大きな差は見られなかった。だが、授業風景には大きな差があった。

月曜朝8時過ぎ、子どもたちが登校してきた。夏休みが終わって2週目だが、すでに通常の学校生活に戻っている。

「日本の学校は夏休み中もたくさんの宿題があるので、子どもたちは休み中でも勉強に追われるのですよ。」と、学校事務のホーレンシュタイン(大川)さんが説明してくれた。彼女は、日本語の他にドイツ語を話す数少ない職員である。鈴木校長は日本語の他は英語を話す。校長は他の派遣教員同様、ウスター市に住居をもち、「閑静で友好的な市」に好感をもっている。日本の教員が海外派遣を希望する際、赴任先は日本政府が決定し、教員はそこに3年間滞在することになっている。赴任地及び周辺国の見聞を深めるという理由から、その間の帰国は許されていない。

(注：赴任期間は2～4年間。帰国は特殊事情の場合のみ可。)

日本人学校に子どもを通学させる日本人家庭も、多くはウスター市内に居住している。その一人、Hさんご一家は、子どもたちを日本人学校に通わせるためにこの地に引っ越してきた。彼女にとって日本の教育を子どもたちに受けさせることは、将来帰国するためにたいへん重要なことである。Hさんいわく「保護者はスイス人との交流は少ないが、保護者同士のコンタクトはたいへん密接です。」とのこと。子どもの送り迎えや、ランチ会、習字教室で顔を合わせているようで、日本の母親同士より密接である。



記事が掲載された紙面(上・下)



「多くの保護者は日本企業からスイスに派遣されますが、駐在期間が2～3年であることが多く、現地校ではなく日本人学校を選択します。ただ本校は私立学校としてチューリッヒ州の認可を受けているため、現地校への編入は問題ありません。」と、ホーレンシュタインさん。

授業料は全日制が年間約8000フラン、補習校は2000フランである。日本政府が多額の援助をしており、教育課程の指導に当たっている。

例えば、以前どの学年も45分授業だったが、中学部は50分授業の義務化が指導された。子どもたちには、日本でおなじみの制服着用の義務はない。

日本では1学級35人程度がふつつだが、現在この学校は16名の児童生徒が1～9学年に在籍しており、先生と生徒の1対1の授業になる場合もある。それに家庭的な雰囲気か、日本の調和の文化がそうさせるのか、この日の朝には機嫌の悪い子どもや先生は見当たらなかった。

休憩前の午前10時に、2階部分の学校説明を受けた。授業を受ける子どもたちの目は先生が書いた黒板に集中していた。ほとんどの教科はスイスと同様であったが、音楽の授業は違った。鍵盤ハーモニカという、ピアノとハーモニカを融合させた楽器を使用しており、他に運動会や行事で演奏される和太鼓の練習をしていた。

授業内容を説明するのはたいへん難しい。なぜなら英語の授業ですら日本語で行われていたからだ。ちょうど1君が受けていた中1英語では、英文法を学んでいた。彼は日本語と英語を話すが、文法はあまり得意ではない様子。イアン君は、将来日本で勉強したいとの思いが強い。「スイスはよい国だけど、チーズが嫌い。」と1君。他の中学生、ロシティとフォンデュが好きだという女の子たちにも話を聞いたところ、スイスに残ってもいいと言っていた。少なくとも子どもたちにとって、スイス滞在の決定は胃袋が決めるらしい。

学校生活にとっても、食事は重要な役割を占めている。昼食時は、私たちが使用するようなタッパーのような弁当箱をひろげ、教師と児童生徒たちが一緒になって昼食をとるのである。

ウスター市ごみ集積所を見学して(小学校4年生社会科)

9月3日(木)に、小学4年生3人が社会科の学習のため、ウスター市ごみ集積所の見学をしました。ウスター駅に隣接する集積所に到着すると、ここで働いているクレッチマンさんがにこやかに私たちを迎え入れてくれました。カートンや新聞紙、ビン缶類、油、金属類など、細かく分別されていました。以前は有料だった家庭用電化製品を無料で引き取るようになったのは、山や森などに不法投棄をするのを防ぐためだそうです。美しい国土を守ろうとするスイス人の心を感じさせてくれました。



記者のインタビューを受ける中学生



熱心に説明を聞く小学4年生